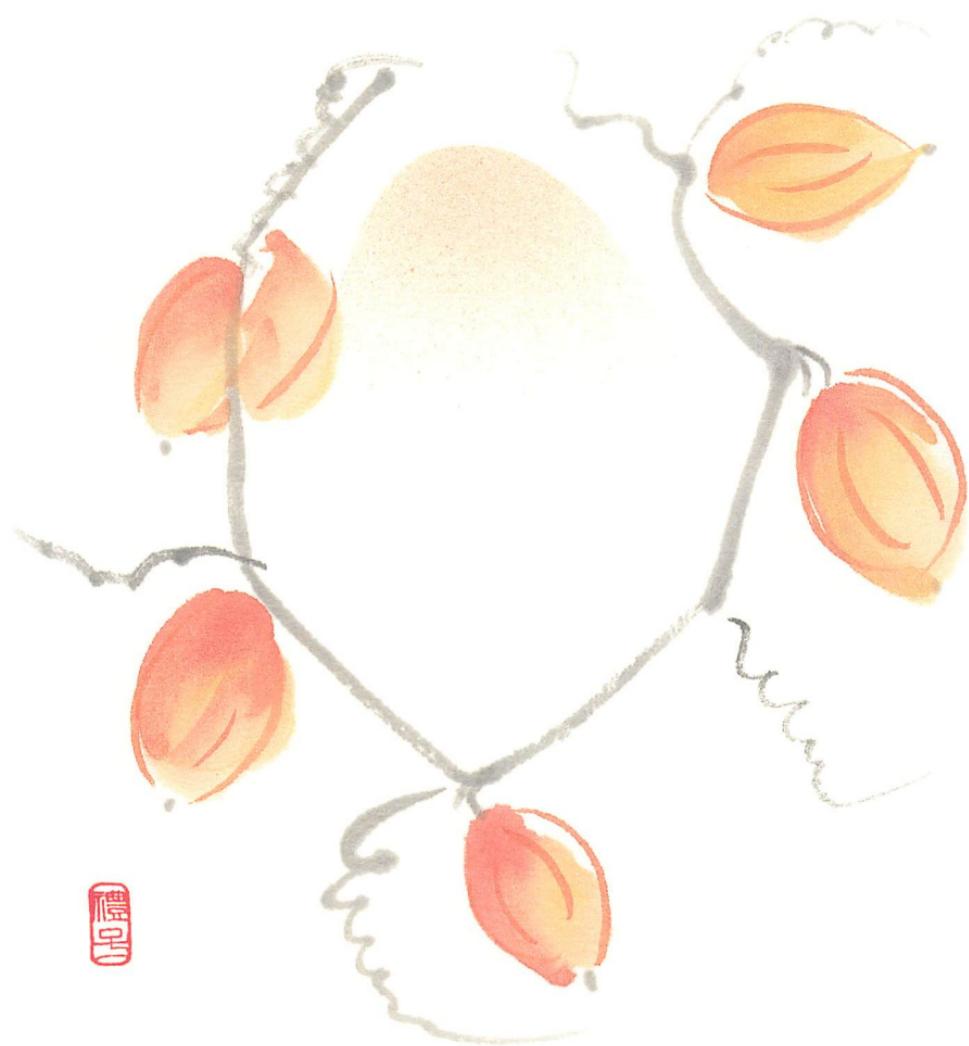


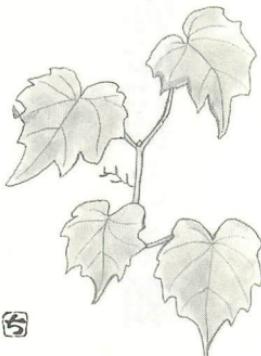
みめぐみの

第46部



みめぐみの

第46部



5

大谷光道著

目次

阿弥陀様と本願（十二）	2
電気アイロンと阿弥陀様	9
国費の無駄遣い？	10
「制御」って何？	13
阿弥陀パワーで少しはマシに？	15
コマーシャル	17
日本語を大切に	22
科学の役割と宗教の役割	25
本願寺の社会的役割	28
読者の貢	30
あとがき	32

阿弥陀様と本願（十一）

今回は、極楽のありさまや菩薩の徳の説かれた、二十八願から三十四願までです。

第二十八願 設我得仏、國中菩薩、乃至少功德者、不能知見、其道場樹、無量光色、高四百万里者、不取正覺

私が成仏するとき、私の国（極楽）の菩薩で、たとえ功德の少ない者でも、菩提樹が限りなく光り輝き、高さが四百万里であることを知ることができないようであれば、私は覺つたとは言いま

せん。

(見道場樹の願)

道場樹 || 菩提樹
乃至少功德の者 || 少功德の者（自力修行の人）でもこのようである（多功德の者（他力念佛行者）はさらに勝れている）。

高さ四百万里の木とはどんなものでしようか。このお経が翻訳された時の
一里がいつたいどれほどなのか、わかりませんが、今で言うと一里は約三・
九キロメートルなので、これでいくと、四百万里 || 一五六〇万キロメートル
となります。地球と月の距離は約三十八万四千キロメートルなので、四百万
里はその約四十一倍、つまり地球から月まで行く距離の四十一倍、地球と月
を二十往復以上する距離ということになります。また、地球と太陽の距離は
約一億五千万キロメートルなので、さすがこれにはかなわず、約九・六分の
一にしかなりません。しかし、この木を十本も接ぎ足せば太陽に届くという
ことになります。

一里がどれほどの長さだったのか、いずれにしても四百万里というのは、私たちにはとても想像することは不可能な高さです。それをどのようにして認識するのか、「少功德」の者でも高さと美しさがわかるというのですから、私たちが極楽に往生させていただいたときの覚りの内容の立派さがわかります。

そして、「乃至……」なので「少功德の者でもこのようである」、つまり「多功德の者」は言うに及ばず」が省略されています。「少功德の者」とは自力修行で往生した人のことで、「多功德の者」とは他力念佛の行者のことです。他力念佛で往生した人はこれ以上、すなわち、無限大の菩提樹を観ることができます。

第二十九願 設我得仏、國中菩薩、若受讀經法、諷誦持說、而不得弁才智慧者、不取正覺

第三十願

私が成仏するとき、私の国（極楽）の菩薩が経を読んで、節を付けて暗記し、他人にも説き聞かせて、自在に弁舌をふるう智慧を得られないようであれば、私は覺つたとは言いません。

（得弁才智の願）

設我得仏、國中菩薩、智慧弁才、若可限量者、不取正覺

私が成仏するとき、私の国（極楽）の菩薩が弁舌をふるう智慧に限りがあるようであれば、私は覺つたとは言いません。

（智弁無窮の願）

第三十一願

設我得仏、國土清淨、皆悉照見、十方一切、無量無數、不可思議、諸仏世界、猶如明鏡、觀其面像、若不爾者、不取正覺
私が成仏するとき、私の国土は清らかであり、まるでくもりの

ない鏡で顔を見る如く、十方の数限りない諸仏の世界を照らし出して見ることができるでしょう。もしそうでなければ、私は覺つたとは言いません。

（国土清浄の願）

第三十二願 設我得仏、自地已上、至于虛空、宮殿樓觀、池流華樹、國中所有、一切万物、皆以無量雜寶、百千種香、而共合成、嚴飾奇妙、超諸人天、其香普薰、十方世界、菩薩聞者、皆修仧行、若不如是者、不取正覺

私が成仏するとき、地上から虚空に至るまで、宮殿・樓觀・水の流れ・木や花など、私の国（極楽）にあるすべてのものが、無量の宝と百千種の香りでできていて、その美しく飾られたすばらしさは天人や人々の世界に超えすぐれ、その香りは十方世界に広がり、これを嗅いだ菩薩は、みな仮の道を修めるでしょう。その

ようでなければ、私は覺つたとは言いません。

（宝香合成の願）

樓觀^{たかどの}物見^の高殿^{たかどの}

第三十三願

設我得仏、十方無量、不可思議、諸仏世界、衆生之類、蒙我

光明、触其身者、身心柔軟、超過人天、若不爾者、不取正覺

私が成仏するとき、十方世界の数限りない衆生が、私の光明に照らされて、その身に触れる者は、身も心も和らいで、天人や人々に超えすぐれることでしょう。そのようでなければ、私は覺つたとは言いません。

（触光柔軟の願）

第三十四願

設我得仏、十方無量、不可思議、諸仏世界、衆生之類、聞我
名字、不得菩薩、無生法忍、諸深總持者、不取正覺

私が成仏するとき、十方世界の数限りない衆生が、私の名を聞

いて菩薩の無生法忍と、深い智慧を得られないようなら、私は覺つたとは言いません。

(聞名得忍の願)

無生法忍 || 一切のものは空^{くう}であり、生ずることも滅することもない(不生不滅)といふ真理を覚ること。

總持 || 陀羅尼 (dharani)。真理を記憶させる力があるとされる呪文。ここでは「南無阿彌陀仏」の六字の名号

「南無阿彌陀仏」という六字の名号が呪文の一種と言われても、すぐにはぴんと来ませんね。呪文と言えば「まじない」という、何かはつきりしない怪しげな力のことを想像してしまってからです。しかし、六字のお名号には、阿彌陀様の数限りないお徳が詰まっているのですから、その意味で呪文ということになるのですね。

⑤



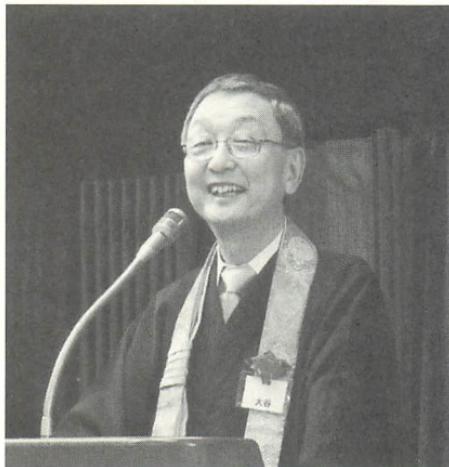
電気アイロンと

阿弥陀様

〔筆者註：筆者の出身校である大阪大學基礎工学部の関東支部同窓会が、去る十月二十七日、東京（東洋経済ビル）で催され、筆者が講演を依頼されました。〕

以下は、その内容に筆者が加筆したものです。」

ただ今は、過分なご紹介をいただき、ご期待に添えるかどうか、緊張いたしております。



今回、私に話をせよというお声がかかつたについて、光栄ではあります。が、「何で私なんだろうか」と色々と考えました。やはり、「基礎工学部出身者にはこんな奴もいる。こういう変わり種もいる」ということで、たぶん「お前やれ」ということになつたのだろうと思ひます。ということで、お話を聞いていただきたいと思います。

国費の無駄遣い？

私は、ご案内のように、昭和四十三年、制御工学科の卒業です。制御工学科の主任教授は櫻井良文先生で、私の卒業研究も櫻井研究室でした。先生は、基礎工学部に制御工学科が創設されるについてご尽力くださつたお方であるとも伺っております。また、先生には、卒業してから後も、娘の結婚式や私の寺の寺務所ができたときの御祝辞をいただいたりなどと、何かとお世話になりました。しかし、たいへん寂しいことながら、今年六月に九十一歳でお

亡くなりになりました。

お通夜にお参りさせていただいた時のことです。式場の二階に先生を偲ぶよすがの品々が陳列されているので、帰りに是非拝見していくようにというアナウンスがあり、それにしたがつて二階に上がりました。先生のお写真だとか、いただかれた勲章であるとか、あるいは論文であるとかが、陳列されておりました。ふと後ろを見ると、——今日もこうして後の懇親会のご馳走が並んでおりますが——、もつとすごいと言つて申し訳ないんですが、お鍋まで用意されていたり、たいへんなご馳走が用意されていました。櫻井先生のお人柄が、そこでも窺われたものです。

私は家内と一緒にお参りさせていただいてましたが、私たちの隣に数人のおばさま方が坐られ、お話を伺うとご近所の方々だということでした。先生がご近所との交流も丁寧になさっていたことが、そのお話から窺われました。そして不思議そうに私に、「どういうご関係?」と仰るので、「櫻井先生の弟

子です」と申しました。こういう格好（袈裟、衣）で行つたもんですから、「何でこんな人が弟子なんやろう」と、やはりお顔に出るもんですね。ちょうど、そこへ先生のお嬢様がお通りになつて、私のことを「この方、偉い方なんですよ」なんて仰いましてね。何も偉いことないんですけども、ますます説明がしづらくなつて、そのまま失礼して帰つたことが思い出されます。また、以前、私の同級生の一人が櫻井先生に、「大谷みたいな寺の息子を入学させるということは、国費の無駄遣いです」とお話ししたということを、だいぶん後になつて聞きました。

「何でそんなこと言われんならんのかなあ」と思いましたが、よくよく考えてみると、一理あるのかも知れません。つまり、学校で習つたことを生かすことなく、やがて死んでしまうだろうという思いが、その中にあるんじやないかと思います。

そして、これは私一人のことではないのですが、何年生のときでしたか、

「君たち一人卒業させるのに四百万円かかるんやで」って、どこか大講義室だったと思いますが、どなただつたか先生が仰つて……。当時、毎月の授業料が千円でしたから、四年間で四万八千円、割算すると八十何倍にもなります。これはえらいことやと、そんなことも思い出されます。

「制御」って何？

大学時代、「制御って、何するんや」と、いろんな人からよく聞かれました。「制御」という言葉は、最近ではよく使いますが、当時はまだ珍しかったからなんでしょう。

そんなとき、説明するのもめんどくさいし、私も中身がよくわかつてないので、「電気アイロンの温度調節みたいなもんや」と答えていました。

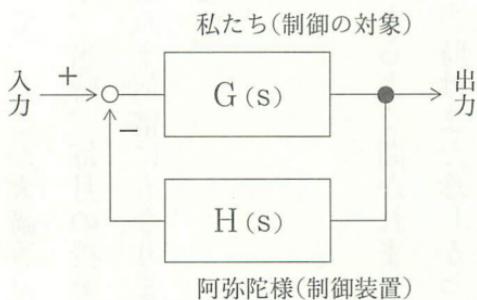
電気アイロンは、熱くなるとスイッチが切れて、冷めてくるとスイッチが入る。サーモスタットとかバイメタルと呼ばれるものが入っていて、それが

温度に感じてスイッチが入つたり切れたりすることは、だれでも知っているので、こんな答ですませていました。でも、「何や、バイメタルの研究をしてるだけなんや」なんて思われても困るので、「それを少しずつでも高度にするのが、僕らの勉強なんや」と、付け加えるようにしました。

それでこれは、私の耳ではなく目にタコのできている図があるので、ちよつと画かせていただきます。

他の学科の方々のことは全くわかりませんが、おそらく何かの機会にこの図には接しておられると思います。制御と言えば必ずこの図が出てきます。四十年経つても、……いや、四十年以上ですね。こんな図がまだ頭に焼き付いて残っておりまして……。

電気アイロンで言うと、 $G(s)$ のところがアイロンのヒーターで、 $H(s)$ のところが温度スイッチ



(バイメタル) です。

このG (s) のところは、モーターであるとか、ヒーターであるとか、エンジンであるとか、そういう実際に仕事をする機械、制御の対象です。アイロンで言うと、ヒーターだけだと、放つておけば熱くなつて焼けて壊れてしまう。火事になるかも知れません。そんなものでも、そうならずに一番適当な状態に保つてくれるのが下のH (s) で、これがいわゆる制御装置、コントローラです。

阿弥陀パワーで少しほましに？

それで、これから思いつくことがあります。

これを、私どものところに引っ張り込んでみましよう。上のG (s) は私たち人間。人間というのは、煩惱の固まりです。放つておいたら、何をするやわからない。

煩惱というのは、まず第一に私たちの欲望です。一つの欲が満たされるとまた次のものが欲しくなつて、どんどんどんどん深みにはまつていく。欲望の連鎖、貪りです。それから、全くしようもないことに腹を立てて怒る。またもう一つは、言つても仕方のないことをぶつぶつ言う。この三つがだいたい煩惱の大きな要素です。

それで、こんなG（s）——人間、私たち——を、ほどよくコントロールしてくださいH（s）が、御本尊である阿弥陀如来であります。ですから、私たちはいつも仏様に付き添われて、寄り添われていることによつて、多少はまともな暮らしができる、行いができるという、私どものところの教えと、これはぴつたり来る、ということをおわかりいただけると思います。

よく「他力」という言葉を使いますが、他というのは、他人の力じやなくて、この阿弥陀仏という仏様の力です。だから、外からこうやつてちゃんと私たちを捕まえて、護つてくださつているという教えにぴつたり来る図だと

思います。

まあ、これで「国費の無駄遣い」も、少しは許していただけるでしょうか。

コマーシャル

で、今日は何の話をしたらいいやろかと、幹事さんのほうにも、何度もお伺い申し上げたのですが、「何でもええからしゃべれ」と云ふことで、「自分ところのコマーシャルしてくれてもええよ」ということまで仰つていただきました。

じゃあ、コマーシャルというか、私どもの自己紹介というか、なんかお志をいただいて、コマーシャルをするってのは、あり得ないのですが、そのお言葉に甘えて、少しその辺りを話させていただこうと思います。

私のところは、親鸞聖人（1173-1262）の開かれた浄土真宗です。この前、

五木寛之さんの『親鸞』というのが出て、私も読みました。小説だからいいのかもしれません、「ほんとにそんなことあつたのかなあ」と、おもしろく読ませていただきました。

親鸞聖人の末娘・覚信尼が、聖人のお墓を作り、三代目の覺如上人がそのお墓を寺にしました。寺というのは、宗教活動をする、布教活動をするもので、その名前が「本願寺」であります。これが八代目の蓮如上人によつて、大きく栄えることになりました。そのあと一向一揆という勢力となり、大名たちから大いに恐れられる存在になつていきました。十二代・教如上人のときには本願寺は東と西に分かれました。

その分かれる前のことを簡単にご説明しましよう。一五七一年から織田信長と本願寺が戦つて、十年ほど石山合戦を繰り広げることになりました。今の大坂城のところがその頃の本願寺で、「石山本願寺」と呼ばれていました。十一代の顯如上人が信長と和睦をして、石山を退去します。

そのあと、一五九一年に豊臣秀吉から土地をいただいて、顯如上人は京都へ移ります。現在の西本願寺の場所です。一五九二年、顯如上人が亡くなり、長男であつた教如上人が本願寺の住職になります。この人はお父さんの顯如上人と一緒に信長と戦つて、もちろん僧としても立派な人でしたが、こつそりと鎧よろいを着て馬に乗つて戦つたという勇ましい記録もあるほどの人でした。

ところが、一年ほどして秀吉から引退を命ぜられることになります。



和やかに懇親会（東京・東洋経済ビルにて）

その理由は、顯如上人の『譲り状（遺書）』で、そこには教如ではなく「准如（教如上人の三番目の弟）に譲る」とあつたというのです。この『譲り状』の真偽が問題となりますと、偽物であるというのが私ども東の主張で、西では本物であると。「本物か偽物か」は、どちらか一つしか眞実はないのですが、この「二つの眞実」をそれぞれが信じて、「東本願寺」と「西本願寺」が、それ以降今日まで続いてきたわけですね。

引退した教如上人に、今度は徳川家康が「あんたまだ若いのに、隠居はないやろう」と言って、京都駅前の土地（方四丁＝五万七千六百坪）をくださつて、そこで建てたのが東本願寺。これが一六〇二年で、このときに本願寺が二つになりました。「本願寺は何で二つあるのや」とよく聞かれるので、いきさつを簡単にご説明しました（詳細は『第四十一部』参照）。

それから、うんとジャンプしますけれども、昭和四十四年から私どものところで内紛、紛争がおこりました。このときは父の代で、新聞等にいっぱい

いろんなことを書かれましたが、何で紛争が続いたんやといいますと、その根本的なところは、教えの問題、教義の問題です。

紛争はずつと続いて中々解決はせず、平成五年に父が亡くなりました。それで、本来は長男であるところの私の兄が二十五代目を継ぐべきところですが、父の遺書に「あとはお前がやってくれ」と、私の名前が書いてありました。その理由として、兄は「紛争に協力しなかったから」とありました。

その紛争の中で父は、「どうしても本願寺を別の所に作らんといかん。そうしないと、自分のほうの正しいことを主張する拠点がないと困る」ということで、色々と準備をしていましたんですけども、それが形にならないまま亡くなってしまいました。ですから「あとはお前がやってくれ」というのは、抽象的なことではなく、「本願寺の機能を別の場所に移し、正しい教えを広める」ことなのです。

私の代になつてから、また十年ほどかかって、平成十六年にようやく京都

嵯峨に土地を買い求めて、十七年に寺の仕事のできる寺務所ができました。そして去年、ようやく本堂が完成して、一応寺の形ができたと、こういうことです。

日本語を大切に

次に、教える上での違いとは何か、ということです。それは、まことに簡単な内容で、仏教的な専門用語を使わないと説明できないような難しいものではありません。

「往生」という言葉があります。これは「往つて生まれる」という、その字からも明らかのように、「私たちが死んでから、極楽へ行つて生まれること」で、それ以外の解釈はあり得ません。もちろん、国語辞典等にもそう書いてあります。

ところが、紛争の相手方は、往生とは「行つて生まれる」のではなくて、

「今ここで往生するのだ」つまり「生きたままで、往生するんだ」と唱えてきたのです。これは「行っていない」のに「行った」と言つて、言葉の意味をねじ曲げているわけで、教えの上ではもちろん、明らかに日本語としても間違っています。

平成元年に『岩波仏教辞典』という辞書に「往生というのは、生きたままのことである」という記述があったので、西本願寺のほうから岩波書店にクレームが付きました。その結果、この辞書は少し訂正されました。それは、西本願寺とか高田派（また別の真宗の一派）などは「往生は死んでからのことである」と、「東」——と言つても、我々と違うほうの組織、——では「生きているうちに往生する」と、両者の違いが並記されたので、ちょっとはマシになつたかなというところです。

そして、「生きているうちに往生する」などということを信じる人が増えてまいりますと、私は、世の中にも悪影響が出てくると思います。つまり、

往生するということはそのまま成仏するということで、成仏というのは覚りを開いて仏様になつたということであります。ご承知かと思いますが、淨土真宗は修行をいたしません。やつても身に付かないからというのが、開祖・親鸞聖人の考え方です。

それで、修行もしないのに仏様になつたというような思いの上がりの人間があちこちに増えてきますと、これは日本という国がおかしくなつていく、大げさと思われるかも知れませんが、大問題になると私は思いまして、今日は是非ともこれだけは聞いていただきたいと思ってまいりました。

私は、ここでコマーシャルはしても、皆さんに私どもの信心を押しつけるわけには、もちろんまいりません。しかし日本語の常識としても「生きている間の往生はおかしい。往生は死んでからのことだ」ということを、ここで再確認していただいて、頭の隅っこにおいていただくことが、今後の私たちに対する大きな応援になるのです。

正しい信仰を持った信者を増やすのが私の仕事ですが、信者以外で正しい信仰を理解してくれる人を増やすのも、私の仕事なのです。そしてまた、信者以外の方の理解のほうが却つて客観的で説得力があるのです。これによつて、正しい教えが支えられることにもなるのです。

科学の役割と宗教の役割

それと、今日のこの同窓会の目的が、「科学と技術の融合により、人類の真の文化を創造する」と言う基礎工学部の創設理念のもと、「関東近隣在住の会員を中心に相互の親睦と交流を図る」ということになつておりますが、私はこれには中々お役に立てません。お役に立てない者が、今日お話ししたというのは、ものすごく気になることです。かと言つて、これを邪魔するものでも決してありません。

宗教と科学については、時々議論されます。たとえば、「私たちが死んだら

どうなるのやろう」ということを考えてみると、「それは何も無くなることだ」と。それは確かに事実であつて、第三者からすると、死んだら骨になつて、埋めてしまえば、それで終わりです。このように、みんなで見て、だれが見ても「これはこうなる」ということを、一緒に確認できるのが、客観世界です。これは科学の立場です。

一方、今、死のうとしている本人にしてみると、そんなわけにはいきません。「死んだら何も無くなるんだ」と言つても、今まで、生きている間は、自分以外のものを見て、「ある」とか「ない」とか認識、分別してい



制御工学科・電気工学科の卒業生の方々と

たのが、その認識の主体である自分が今死のうとしているわけで、それはどんなことなのか。宗教というのは、この主観世界を解明していくもの、私たちの心の世界を課題としていくものであろうと思います。自分以外のものを認識し、それとかかわり、喜怒哀楽を感じてきた、その主体の解明、救済が課題です。

宗教と科学は、主観世界と客観世界という全く別の分野を扱っているものなので、決してぶつかったり重なったりすることはありません。強いて言うならば、我々人間自身の中で重なっている、つまりだれにもこの両方が必要なのです。

そこで、たとえば、病気が治るようについてて拝んだり、お金の儲かるようについてて拝んだり、入試に合格するようについてて拝んだり、あるいはまた、いい人と結婚できるようについてて拝んだり、こういうのを現世利益と言いますが、これは客観世界の幸福、つまり他人からも見える幸福です。

これは本来宗教が扱うべき世界ではなく、病気なら医学、お金儲けや入試などは本人の努力しかありません。親鸞聖人の浄土真宗は特に、現世での幸福を祈つたり願つたりすることを許さない、その点は非常に厳しい宗教です。

厳しいというより、こんなお祈りは所詮無駄だからです。元々仏教というのは、そういう宗教なんですが、それを特に強く私どものご先祖・親鸞聖人は、厳しく考えていかれた方がありました。要は、心の救済、自分の心を阿弥陀様にどうしていただきかということしかないのが、私どもの宗教であります。

本願寺の社会的役割

私どもも、京都嵯峨に拠点ができたので、まず第一に「正しい教えを正しく伝えていく」という、父の願いを実現していくことです。

自分のことを棚に上げて言いますがね。よく、お寺さんがあまり世の中から信頼されていないと聞きます。「お経を読ませてもへたくそやし、いろいろ

ろと教えることを聞いても何にも知らない」という批判が多いのが実状だと思います。ですから、私どものところでは、まず第一にそういう僧侶教育ですね。特に次の代の住職になろうとする人を、簡単に言うと、しごいてですね、立派な人を作つていきたい。それにこれから徹していこうと思います。そのことによって、世の中に対しても、何かのお役に立つていける。そもそも本願寺というのは、直接檀家のお世話をあたつてきた末寺と違つて、そういう僧侶教育をするのが仕事なのです。その原点に戻るだけのこととも言えます。

「同窓のよしみ」は、理屈なしに通じるものがあります。今後何かと、皆様のお力等、お借りする場面があるかと思いますが、是非ともよろしくお願いしたいと思います。

後の懇親会のお料理も鮮度が落ちてはいけないので、この辺で終わりにいたしたいと思います。今日はどうもありがとうございました。

読者の頁

感想意見

京都都市 岡野 博久さん

(大谷派僧侶)

東京（浅草）の初代論、なるほどと納得しました。

光紹新門様について、紛争当時なぜ自ら先頭に立たれないのか疑問に思っていました。そのへんの事情について今号を拝見して少し理解できたような印象です。

ただ象徴門首の地位は受け入れ難いものでどうから今日的な情況は変わらなかつたと思いますが。

明照院殿（光道台下のかつての院号）におかれましては、本願寺の伝統をこれからもお伝え下さい。ホームページやフェイスブックでの情報の発信を期待しております。

東京都武藏野市 鈴木 健太郎さん

寛人さんの順調な御成長をお喜び申し上げます。寛人さんの御写真を拝見して、お顔が御門跡様によく似ていらっしゃるという印象を受けました。

私の家におりましたミニチュア・シユナウザーダは十七歳まで生きましたが、最後の二年間は寝たきりでした。ジェニーさんは大きいですから一人では運べず、小さい

犬に比べて介護は大変だらうとお察し申し上げます。

いつもながらのご投稿、ありがとうございます。

実は、ウチのジエニー（ゴールデン・レトリバー）ですが、九月十九日に亡くなりました。

今年二月頃から寝たきりになり、やがて床ずれに苦しむようになりました。三十五kgあつた体重が次第に二十kg近くにまでに減りましたが、仰るように重い体に変わりはなく、しかもウナギのようになくなつとしているので、主に私が朝晩一時間近くかかって介護する毎日でした。

獣医さんも丁寧に診てくださつたし、ペット専用の火葬場にもつれていき、できるだけのことはしてあげたつもりです。

思えば、十五年と八ヶ月、人間ならば百十五歳くらいの長寿になるのだそうですが、私どもの激動期をずっと支え続け、癒してくれた「同志」でした。

畜生は往生できないと言いますが、そうは思えないほど、最期は幸せそうな穏やかな顔だったので、きっと極楽に行つてくれたものと思われます。

〔光道〕



あとがき

みめぐみの刊行委員会

本願寺のある嵯峨の山々は紅葉の季節となり観光シーズンを迎えてます。今回の「阿弥陀様と本願」は二十八願から三十四願に進んでいきます。

もう一編の「電気アイロンと阿弥陀様」は先日の東京での講演に加筆されたものです。一般の方にも分かり易いように電気アイロンのサーモスタッフを例えに阿弥陀様のおはたらきを説かれました。

また、紛争の根本原因が教えの上の違いであり、それも日本語の常識の範囲で理解できるとして、門徒に留まらず、社会一般の方々への理解を呼びかけられました。

最後にはこれから、本願寺の本来の仕事に触れ、今後はさらに若い僧侶の育成に力を注ぐと語られ、未来に阿弥陀様の本願を伝えようと精力的に外部にも働きかけられる光道台下のお姿を感じ、本願寺を盛り上げて行きたいと思います。

皆様からのご感想、ご質問をお待ちしております。どしどしお寄せ下さい。

みめぐみの 第46部

2012年11月5日 印刷
2012年11月10日 発行

定価 200円

著 者 大 谷 光 道

発 行 みめぐみの刊行委員会

〒616-8432

京都市右京区嵯峨鳥居本北代町21
本願寺寺務所内

TEL.075(882)6262 FAX.075(882)6220

振替口座 01060-5-56990

印 刷 (株) 中 外 日 報 社



みめじみの刊行委員会刊